

上で講演した原稿に多少の修正を加へたものである。脱稿後友人の注意に依つて西田魚澄兩學士が昨年頃から同様の論文を『歴史と地理』誌上に發表されて居るといふことを知つた。これを見ると大方私の申す事となつて居つて、些か蛇足を添

へたやうな感もあるが、併し觀察の立場が少からず違つて居るから其儘掲載を乞ふことにした。特に記して兩氏及大方の諒察を希ふ。

德川時代に於ける國學者對儒學者論爭

文學士 清 原 貞 雄

一

德川幕府が風教に對する政策として儒教本位を採り、特に朱子學を官學として保護せる結果、林家を中心とする此一派が殆ど學問界を獨占するの概ありしは今更言ふを須ゐず、然るに之に反抗して儒學界には中江藤樹の王學派、荻生徂徠の古文辭學等の諸派勃興したりしが、之と共に國學界には復古派起り、契沖、荷田春滿に發し、賀茂眞淵、

本居宣長を経て、平田篤胤の高唱に至り殆ど一部

の思想界を風靡したりき。斯くと見ては從來幕府の保護を利用して、永く學界獨占を期したりし儒學者流の如何で黙過すべき、果然復古國學者に對する應戰の火蓋は眞淵の國意考に對する海野公臺の讀國意考に依りて開かれたり。

抑儒學者の支那本位に對して、國民的自覺ともいふべきものゝ發現は早く山崎闇齋等にも見え、水戸光圀を頭目とする水戸學派等も既に絶叫せる所なり。其他純粹の儒學者にして日本主義を抱ける人も無きにあらず。然れども之等は今問題外な

れば論せず。而して復古國學派の先驅春滿の創學
校啓文なるものに「漢學のみ盛にして國學甚だ衰
ふ、臣の至愚何をか知らん」云々の反儒學的辭章
ありと雖も、之れ學者の疑うて、後人の作爲となす
所、されば實際國學者として旗幟を鮮にして漢意
を駁ししは眞淵の國意考を以て權輿となすべし。

二

國意考は明和の初、眞淵が六十八九歳の頃著は
せるものにて、主として、自然に近き我古代を揚
げ、人爲多き漢意を排せり。之れ古文辭學派の、
人巧を排斥し、人心自然の發達を助成するを理想
にしたると相類するものにして或は眞淵等の復古
説が徂徠によりて誘發せられたりとさへ論せらる
る所以なり。されどそは必ずしも當らず。盖し元
祿時代は文運蔚然として起り、學問界自由研究の
聲高まれる時にして、伊藤仁齋が復古學を唱へ、

荻生徂徠が古文辭學を立て、共に從來の末節の
詮索に捕はれたる學風を脱せんとし、天下滔々と
して其風靡するところとならんとせる時なりしを
以てなり。而かも眞淵等の無爲論が老莊に負ふ所
あるは否定すべからざるところなり。

國意考の大要に曰ふ、必ず聖者に世を譲りして
ふ支那の上代の有様も、實は徹底せざるものにし
て、聖人の世なるものも畢竟後世の構説のみ、我
國は天地の心のまに／＼治めたるものなるが、か
の生さかしらなる儒の道入りて後、種々の亂りが
はしき事生じたり、又我國には同族相娶るの蠻風
ありしとて攻撃すめれど、我邦とて同母兄妹相娶
りしにはあらず、却て支那に於てこそ實母を犯せ
るものあるにあらずや、文字の如き、儒學者は只
其輸入を誇れど、此繁難なる象形文字あるが爲め
に、我文明の發展を阻止せられたるもの幾何ぞ。
支那にていふ所の仁義禮智信等の名稱の、我上代

に無かりしとて卑むものあれど、之れ春夏秋冬の名なき時は寒暖も無しといふに等しく、我上代に其實ありて名なく、却て名のみありて支那には其實無かりしを知らざるなり。すべて支那の世教は人爲のもの、我邦の教は天地自然の大道にして、而も無爲にして治まりし我上代の貴き所以こゝにあり、又我邦は由來尙武の國にして、勇猛は固有の徳なり、然るに儒教入り、佛教入りて柔弱に陥れりと。

之に對する海野公臺の讀國意考(漢文)に曰ふ、眞淵動もすれば「直」を云へど、直は直情徑行の直、即ち戎狄の道なり、聖人の道を知らざるものなり、我國の上古異母兄妹の相婚せるは之れ禽獸の道なり、文字あるは聖人の國あるのみ、眞淵が繁文褥禮有害無益とせる禮樂こそ治國必須の具なりと。降りて、本居宣長の門人橋本稻彦は文化三年に辨讀國意考を公にして更に公臺の説を反駁せり、

先づ讀國意考の著者を以て、徂徠の未流なりと斷じ、眞淵には假令多少の瑕瑾はありとも、其古學を開ける功は没す可らずと論じ、次に讀國意考の章句を掲出し、逐條之に批評を加へたるものなり。要は、聖人の道なるものゝ無用にして寧ろ危険なるものなる事を説き、又漢學者派が動もすれば文字を傳へたる恩を口にすれど、之れ眞淵もいへる如く、我邦にやがては自然に出でゝ行はる可かりし便利なる音韻文字の妨げをなして、かの面倒なる漢字を國字たらしめたりとて、其輸入を以て國のため害ありとも益あるものにあらずとなせるなり。

三

是より先き、眞淵の説を受けて古道を唱道せるは本居宣長にして、其著直毘靈にこれが主張を披瀝せり。曰く、我皇天御國は神祖天照大神の生國に

して大神親ら子孫に授けませる國なり、古來、道などいふ名は無かりき、降りて漢籍渡來して後、其を學ぶに至り、之を我古代の手ぶりと區別する爲めに神道なる名稱をも生せるなり、其後漢學益盛になり、從て庶民の心まで變化を來し、こゝに安く平かりし皇國に、亂りがはしき事も生ずるに至れり、抑も此天地の間にあらゆる事物は悉く神の意なり、就中、禍津日の神の心の荒びは是非もなき事なれど、天照大神は高天原に座して神光毫も曇る事なく、其傳へられたる天津日嗣は連綿として繼續す、然らば我古の道とは如何なるものぞといへば、天地の自らなる道にもあらず、人の所作にもあらず、實に高御産巢日神の御靈に依りて

諸冊二神の始め給ひ、天照大神の受け給ひ傳へ給へる道にして、之を神道といふ、人は皆、産巢日神の靈に依りて生れ、身にある限りの行は自然と知りて爲すもの、古は下が下まで唯天皇の大御心

を心として専ら其大命を畏み、各祖神を齋き祭り分相應の事を務めて、世を安く渡る外無かりしかば、特に取り立て、道と説くべき事もあらず、強ひて求めんとならば、漢意を祓ひ清めて清々しき心を以て古典を學ぶべきなり、之れ神の道なりと。

これに對して、市川匡麿の名を以て、市川匡は未賀能比禮一卷を著してこれを評せり。曰く宣長は神代の傳説を以て、神業にして漫に人智を以て忖度すべきものにあらずとなせど、日本の神代の事も實は人事にして皆理を以て解釋し得べきものなり(新井白石の古史通の流を酌めるものか)又同姓相娶るは野蠻の民のする事にして、神代は決して宣長等の主張する如く渴仰すべき時代にあらず、聖人の道入りて始めて男女の別も明かになれり、宣長は支那の篡奪を攻撃するも、我邦とてこれなかりしとはいふ可らず、古事記、日本書紀に載せ

ずとて信用する能はずと。

之に對して更に宣長が一矢を酬いたるは安永二年に著に係る葛花二卷なり。先づ未賀能比禮にある章句を揚げて、一々之に駁撃を加へたるものにして、宣長が老莊の説に似たる「自然」といふ事を讚美するを老莊の如き聖人にあらざるものゝ説を採るは不可なりとせるに對して、之れ恰も博徒を惡むの餘り、其火を救へる行爲をも併せ惡むの類にして、頑冥いふに足らずとなし、又我神代の傳説を近世の理義を以て説くべしとの市川の說に對して、之れ漢意に泥めるものにして、日本の神々の所業は、尋常の理を以て測り得べきにあらずと論じ、又聖人の道最も勝れたりとの説に對して、聖人は假面を被れる大なる盜人なりとして、支那の國態の非を説き、易、八卦等の取るに足らざるを斷せり。

四

其後國學者の假面を被りて、眞淵、宣長を併せ攻撃せるを沼田順義とす。順義は本姓大三輪氏、寛政四年上野國に生れ、始め醫を學び、明を失して後、江戸に住み、林述齋の門に學べる人なり。(本朝賢人傳)當時官學を獨占して異學の絶滅を期せる述齋の徒は國學の漸く隆盛ならんとするを見て不安の餘、漢學にも通じ、同時に國學にも明らかなりし順義をして、眞淵、宣長に當らしめたるなりと論ずる學者あるも、(藤岡博士國學史)果して如何あらんか。述齋が順義の科長戸風に序文を寄せて盛んに推奨せるは事實なり。順義は眞淵の國意考に對して國意考辨妄を著はし、宣長の直隗靈、葛花に對して、前述科長戸風を著して並びにこれを攻撃し、又直隗靈を攻撃せる市川匡の未賀能比禮をも淺薄見るに足らずとして併せこれを非難せり。國意考辨妄科長戸風何れも其被攻撃書の本文を摘出し、之に對して逐條論駁を加へたるもの

にして、其大要は、日本人として支那を輕んずるは尙可なるも、同時に其國の聖人をも併せ罵るは亂の基なり。支那にても武王の如き悪きには相違なきも、そは他の聖人の價値を害ふものにあらず、といふにあり。特に科長戸風は全部三卷、滔々數萬言、是迄の他の諸儒の論難に比して一頭地を抜けるものにして、且つ努めて公平の態度を持ち、林述齋の序文にもあるが如く、探るべきは探りて、寧ろ國學者の側に立つ事を標榜しながら實は儒學の思想を根柢として復古派の國學者を攻撃せるものなり。山本宗瑛、幻菴道人、田澤仲舒、及時居士、魚澄璞、金子祐倫等亦これに序文を寄せ、又國意考辨妄には小松未雄、林璋、金子祐倫、木崎道菴等、同じく序文を寄せて、何れも眞淵、宣長等を駁撃せり。

之に對して、平田篤胤の門人、新庄道雄は葛根を著して級長戸風を反駁し、又豊前の人原重枝

も迦倍志廻風を著して、同じく科長戸風を攻撃せり、是に於て靜齋義雄なる人、伽倍志廻風辨妄二卷(天保五年)を著して重枝を論難すれば、重枝は更に、神傳伽倍志廻風正言を以てこれに應戰し、信濃の人、小林文康、麻須美鏡二卷(天保五年)を著して科長戸風を攻撃すれば、三芳野直道、辨鏡眞偽級長戸追風二卷を著して其説を駁し、天保九年には下總の人、菅原定理は花能志賀良美一卷を著して順義の級長戸風を辨難して、宣長を忠肝義膽の名臣、沼田を巧言令色の佞人と罵り、さては宣長は晴天の朝、高山の巔に登りて四方遠近を望むが如く、沼田は雨天の夕、麓の谷間にぞみて望む所數歩に過ぎざるが如しと極言し、殊に沼田が直毘靈、葛花等を通編熟讀せずして漫罵せるを排せり。さるを天保十一年には伊勢茂美非葛花を著して宣長の説を反駁せり。斯くて兩派の末流に至りて論争益激甚を加へたり。

五

是より先き、藤井貞幹(享保七年—寛政元年)は衝口發一卷を著して我邦の言語の大部分が上古、韓語韓音、又は支那音なりといふ論據より出發して、日本の皇統は吳の泰伯の後にして、韓國を経て我國に入れるものなりと主張し、之に對して宣長は鉗狂人を著して駁撃するところあり、其中に、日神を我國固有の神なりとし、我國を世界萬國の最上に位するものなりとの説あるに對して、上田秋成が其専門の言語學の見地より評して、固陋の見なりとせるを憤慨して、却て我國體を害するものなりと論破したるを呵刈セキ二卷となす。其書名に刈セキを呵すと稱したるは、秋成が大坂の人なりし故にして、其前編の終りにある宣長の「清めをく道さまたげて難波人、あしかるものを咎めざらめや」とある和歌に取れるなり。此書内容は前後合

せて二十條より成れり。此鉗狂人及び呵刈セキを併せて評したるものに柳靈賀摩一卷あり、何人の著なるやを知らず

六

最後に最猛烈に儒學を攻撃せるは平田篤胤なり其最も早きは二十八歳の時に著せる呵妄書にして太宰春臺が其著辨道書に論せる聖人の道を、逐條駁撃せるものなるが、此頃は猶後年程極端ならずして、中には春臺の説を援けたる點もあり、比較的穩健なるものなり。然るに年と共に其排他的氣分は激烈となり、彼れが無数の著述の殆どすべてを通じて其氣分の横溢するを見る。而して之を纏めたるものとしては、對佛教のものに出定笑語あり、對儒教のものに西籍慨言あり、大要我邦古來政治上の禍害、道德上の弊風等を悉く儒教、佛教の罪に歸したり。古今妖魅考、古今乞盜考等は其

議を歴史に例證したる書なり。而して、かの唐土にいふ所の扶桑國は我邦にして、三皇五帝なるもの皆我皇孫に外ならずといふ論據に成る所の大扶桑國考を出せるを導火線として、林家のために排斥せられ、其書は絶版に附せられ、天保十五年には遂に江戸より其本藩秋田に歸國を命せられたるなり。

之を要するに、眞淵、宣長の頃は主として其鋒先は儒學に向けられ、篤胤に至りては漸く佛敎に向ても同じく猛烈なる攻撃を加ふるに至りたる傾

向あり。而して其敵味方共、論ずる所は反對論を批評するよりも、互に其根本即ち、國學者側の攻撃する所は、支那の國柄及び聖人其もの、又儒者側の攻撃する所は専ら我神代の社會、儒敎輸入以前の日本の國柄其ものなりしに、末流に至りては、論旨漸く枝葉に走りて、言葉の用ゐる方、てにをばの誤り等を穿鑿して専ら其揚足取りを能事とするか、然らざれば人身攻撃に没頭して、醜狀殆ど見るに堪へざるものあるに至れるなり。(大正八年五月十八日)

西比利亞の河川と北極海との連絡航路(下)

文學士 内 田 寛 一

五

オブ・エニセイ兩河の水路は以上述べたるが如

くであるから、之と北極海航路との實際上の連絡についての問題はカラ海の航路である。

東北航路探險の歴史は暫く措きカラ海航路のみ